

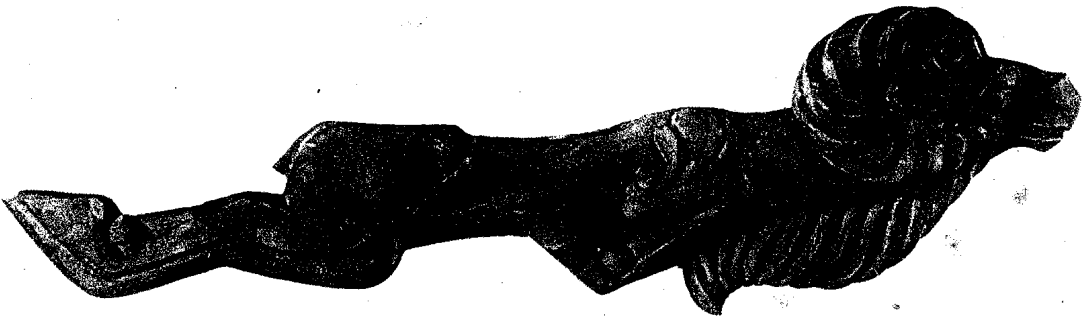
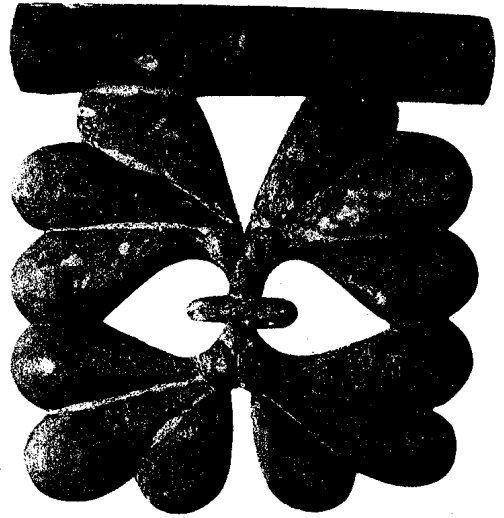
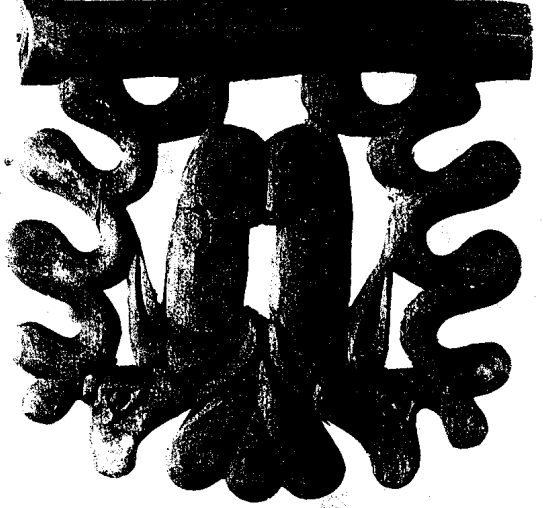
Title	アルタイ地方に於ける考古學上の新発見：露西亞博物館員の活動
Sub Title	
Author	梅原, 末治(Umehara, Sueji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1931
Jtitle	史学 Vol.10, No.1 (1931. 3) ,p.1- 27
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	口繪:バズリック古墳發見木製箔置杏葉四種及轡飾
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19310300-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

パズリック古墳發見木製箔置杏葉四種及轡飾

(梅原氏論文參照)



史 學 第十卷 第一號

昭和六年三月

アルタイ地方に於ける考古學上の新發見

—露西亞博物館員の活動—

天山山脈を北に越えたアルタイ地方の古い時代の状態に就いては、古文献に殆んど徴證を見出し得ないのであるが、今より約六十年前露西亞の碩學ラドロフ博士(Dr. V. V. Radloff)が其の一部を踏査した際、考古學上の資料を蒐集して實物からする考察の端緒を開いた。此のラドロフ博士のアルタイ地方の調査は、有名なトムスク及エニセイ諸地方探検の一部として一八六五年に行はれたものであつて、博士は其の夏カタンダ(Katanda)とベレル(Berel)との兩地方で古墳墓若干の發掘を試み、種々の興味ある

アルタイ地方に於ける考古學上の新發見(梅原)

(一)

一

副葬品を得て、古代に於ける同地の文化の相當に見るべきものゝあつたことを明にした。是等の事實の記載は西伯利亞一般の學術研究の上に劃期的な業績をなしてゐる其の報告書や論文(1)に所録されてゐるが、共に概要に過ぎないものであり、遺物自體もモスコウのルミャンツェフ博物館(Rumyantsev Museum, Moscow)裡に埋もれたまゝで、其の後同地域に關する調査はあまり世に聞えないで過ぎた。

處が世界大戰に次ぐ露西亞革命が思ひ掛けなくも此の方面の研究に一の新しい機運を齎した。即ち革命の緒に就くと共に同國に於ける博物館乃至學術調査事業の統一並に遂行の議が識者の注意に上つて、多數の博物館の新設と同時に其の廢合整理も行はれて、上記ルミャンツェフ博物館の遺物が新たに組織づけられた國立歴史博物館(Gosudarstvenni Rosiski, Istoricheski Musei)に移管を見、ザハロフ教授(Prof. A. A. Zakharov)の精細な觀察が行はれて、其等のモノグラフが世に出、遺物の重要性が餘程はつきりとして來たし(2)他方早く一九二〇年に中部西伯利亞の學術調査が相當大規模に計畫せられ、それが引き續き實行の運となつて、アルタイ地方また其の探檢地域のうちに加へられ露西亞博物館(Rosiski Musei, Leningrad)のルデンコ教授(Prof. J. Rudenko)が其の方面を擔當して、こゝに新しい同地の遺跡の開掘が行はれることになつた。ルデンコ教授の統裁する此のアルタイ探檢隊の初期の事業に就いては、なほ詳になし得ないものがあるが、一九二四年のビスク(Bisk)地方の墳壟の調査に相應の收穫のあつたことは現在の露西亞博物館の土俗部に於ける陳列品に依つて明であるし、又同年から二五年に亘るクッディ

ルグ^ト (Koudyrgue) 墓地の調査は出版の略報告⁽³⁾ から、それを知る事出来る。而して一九二七年の夏には一行中のグリヤズノフ氏 (M. P. Griaznov) の手でシベ地方の一古墳が發掘調査せられて、古代東西文化の接觸を徴すべき興味のある資料の顯現があり、更に一昨年夏バズリック古墳の發掘が劃期的の新事實を示して、同地方の古代の狀態を推すに多大の光明を投ずることゝなつたのである。

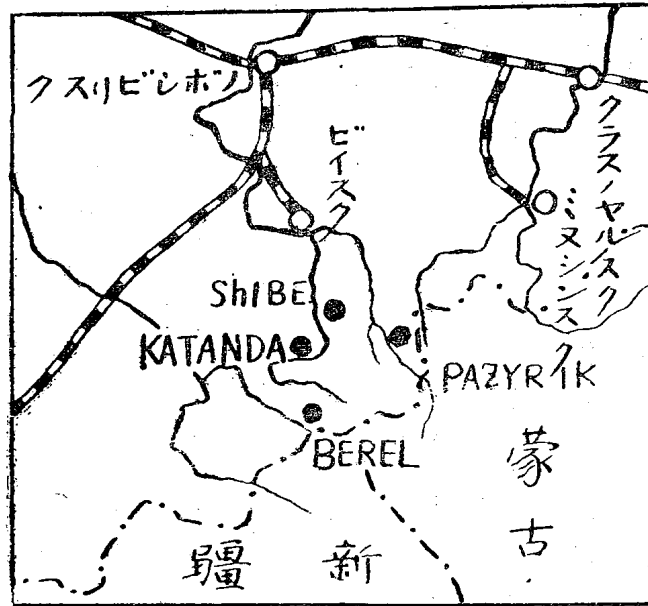
是等の調査のうちビスク並にシベの出土品に就いては、昭和三年秋の入露の際芬蘭のタルグレン教授 (Prof. A. M. Tallgren) から其の重要性を教へられたことであつたが、⁽⁴⁾ 昨秋東亞考古學會の用務を帯びて三度露都を訪ふの機會を持つた私は、アレキセイフ教授 (Prof. Basil M. Alexiev) の配慮に負ふて、露西亞博物館裡ではじめて其等の實物を矚目するの幸を得、特にグリヤズノフ氏の好意に依つて、博物館の當局から全く未發表の是等の資料に對する觀察調査の自由を與へられ、それが前年の北蒙古ノイン・ウラ山古墳の發見品と相並んで廣く東亞の考古學上に最も重要な意義を持つものなのを如實に知り得たのであつた。でこゝに許された範圍内に於いて、シベ、バズリック兩遺跡と其の發見品の一斑を録して右の事實を我が學界に紹介したく思ふ⁽⁵⁾。

二

さてアルタイ地方に於いて掘開調査を経た右の著しい遺跡の位置並に其の外形などに就いての記述に

入るに先立つて、最初ラドロフ博士の注意に上つた二群の遺跡を瞥見するに、其の一のベレールはイルティシュ河の上流に位置し、またカタンダは、それとコルサム山脈(Cholsum)を距て、北方に存し、オビ河の上流に當るが、共に南アルタイの地域に屬するもの。(6)而して兩地に於ける遺跡の分布は、ベレール

第 一 圖



遺 跡 地 略 圖

ルでは約一基米を距て、二つの古墳群が見られ總數約二十基を數ふべく、後者また二群あつて、其の下カタンダ河の左岸に存するものは總數三四十基の間にあり、他のカタンダ村落から二哩を距てた地點のそれは、一の大きな墳壟を中心にして周圍に小墳を有する特殊な配置を取つてゐる。是等は通じて礫石を以て標識たる塚形を成した所謂 kurgan に屬して、博士の發掘の結果に依ると、内部の構造主體は積石の覆ふた地表下に存して、木材を以て主要部分

を形造つてゐたものと解せられる。博士は其の調査の際、短時日の間に割合に多數の古墳を掘開したのであつて、特にカタンダ村落附近の遺跡では中心の大きな墳壟の外に周圍の小墳九個を發掘して居る。當時獲得した遺物は種々の類を含んでゐるが、衣類馬具等に注意すべきものがあつたのはザハロフ教授

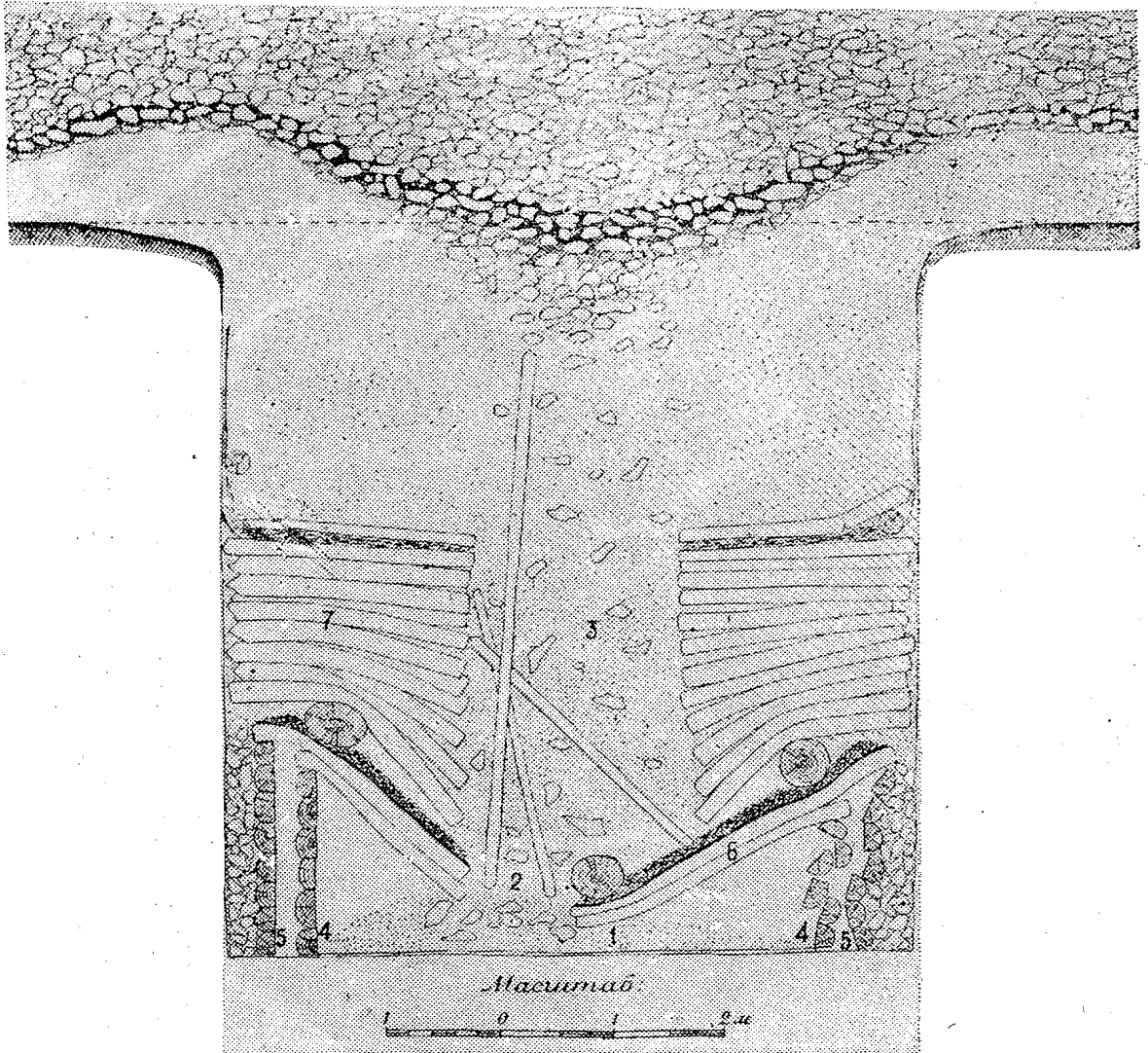
の記述に依つて知ることが出来るのである。博士は是等の調査の経過に關して當時としては比較的詳しい覺書を遺された事が、又ザハロフ教授の文に依つて知られたが、然しそれとても今日から見れば固より不十分な點があり、特に短時日に多數の墳壟を發掘した爲に監督が行き届かないで、其の構造の如きも甚だ明でない部分を含んだものであつたのは止むを得ない。(六七)

是等に對してこゝに紹介せんとするルデニコ教授一行の調査した遺跡は、其の位置の上では前二者よりは北方にあるもので、共にオビ河の分流に沿ふてゐる。即ちシベはウルスラ河 (The river Ursula) に近く、バズリックはウラガン河 (The river Urgan) の流域にあつて、後者の地は東アルタイに屬するのである。此の兩者また共に墳壟の群集地であつて、特に後者は丘陵の腹に大小二十九個の積石の塚を認め得る點から、カタンダのそれと並び稱せらるべきものである。多大の業績を收めた發掘調査はこの兩者に亘つて行はれたのであるが、上記のラドロフ博士の場合とは違つていたづらに多くの遺跡を發掘することを避けて、兩群から重要と思惟せらるゝもの一個宛を求め、出来るだけの科學的な方法で調査を遂行した。かくてバズリックの調査墳は群中の一番大きなクルガンであつて、これがシベの古墳と共に陪葬品に豊富な資料を含んでゐた外に、それから前者の缺を補ふ古墳自體の構造を究め得ることになつたのである。次に項を改めてシベからはじめて其の實際を紹介しよう。

三

第一のシベの古墳の調査は一九二七年の夏に行はれたのであるが、これは一行中の露西亞博物館員グリヤズノフ氏がコマロフ氏(M. N. Komaroff)と協力して事に當つた。いまグ氏に従ふと其の調査に前後四十七日を費したとある。以て調査の周到さが察せられる。塚は從來知られたものと同じく、其の外形は大きな割石から出来た一の積石塚であつて、徑四十五米突、高さ約二米突を測るところ、相當な規模のものである。主要な内部の構造は固より右の外形のうちに含まれてはゐるが、其の積石の中に存するのではなくて、下方の地中に營まれた點にアルタイ地方古墳の共通性を持つ。即ち墓壙は地山に穿開せられてあつて、其の深さ約七米、濶さ約三十五平方米(一邊の長さ約六米)の方形をなしたものである。該壙内の南に偏在して外法で東西六米に近く、南北四米の矩形をした二重装置の室の設があつて、それが棺を置く最も重要な部分をなし、北側の空所につゞく部分の室の一部に戸口が見られる。室は全部木材から成つてゐるが、凍結の爲に幸にも其の腐朽し易い物質が殆んど本來の儘に遺存して構造の詳細を徴し得たのは珍らしい。用材は丸太を中央で折斷したもので、それを巧みに組合せて居り、材の平な面を内揃にしたところ其の架構は校倉の式に近い。天井は側壁と同じく二重になつてゐるが、更に上部に丸太の材を八重に並置して(其の厚さ約一・三米)以て同部の被覆を嚴重にしてゐる。此の天井部の特殊な

第 二 圖



シベ古墳構造断面圖

被覆から室に加はる過重な重力を支へる爲に別に室外の南北兩側に三個宛の太い支柱が立てられ、室の上部で、梁を渡した特殊の設備が見られる。なほ構造上、二重天井と梁との間に白樺を數重置いたことや、天井上部の木材積みの上を覆ふに數寸の白樺其他の枝木を以てしたのなどは細部として擧ぐ可きものであるし、また壙の北部の空所は下底から上部まで丸太材を積重ねてあつて、これは後述の

アルタイ地方に於ける考古學上の新發見(梅原)

如く陪葬の馬の埋められた場所に當つてゐた。

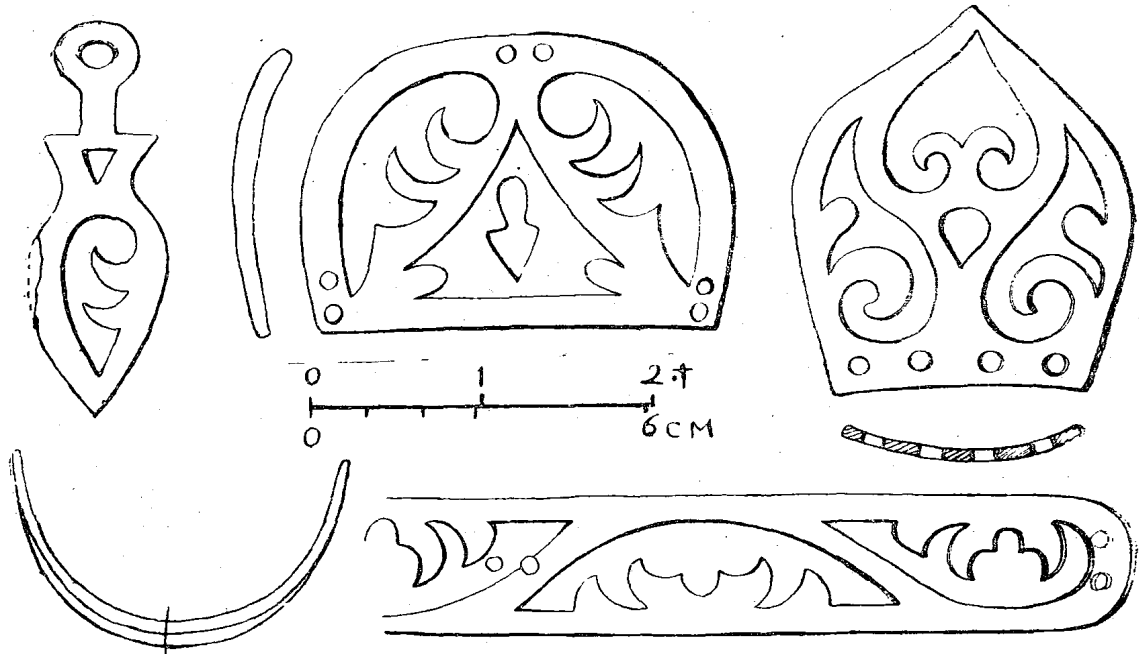
棺は牀の張られた右の二重の室内の南壁に沿ふて置かれてあつたが、これは大木を刳り抜いて作つた長さ三米突内外の原始的な形式のもの、形は簡單ながら身の兩端左右に綱紐を通ずる孔のある部分を突起せしめて、そこに形の變化の示してゐるのが面白い。發掘の際此の棺内に被葬者たる成人男子の木乃伊と、子供のそれとがほゞ完全な状態で存してゐたが、室は多くの古墳の場合に見る如く、既に盜掘の厄に遇つて目星しい副葬品は持ち去られた。然し遺留品のうちに數種の興味ある資料を含み、また槨の北側の丸太積みの下には十四頭と云ふ多數の馬を陪葬してゐて、それが幸に盜掘を免がれ、各個に裝飾具を伴つて、上記の遺品と相俟つて本墳の性質を知る上に重要な寄與をなしたのである。

是等のうち先づ木乃伊となつて棺内に遺存した人體を見るに、其の成年男子は身長一・八〇乃至一・八五糎を示して、埋葬に先立つてそれに種々の手術を施してゐる點が興味を惹く。例へば其の頭骨に於いて左の顛顚骨の部分に穿孔して腦髓を取り去つたのをはじめとし、四肢を切開して其の主筋肉を悉く切り去り、然る後に該部の皮膚を再縫合したことや、細き紐で上下の眼瞼を縫ひ合せたなどがそれであつて、失はれた古代に於ける同地の風習を示す稀有な實例と云ふ可く、この保存は一に墳の内部の凍結に據るものである。

發見の遺物中數の上から一番多いのは裝飾に用ひられた小さな種々の金の薄片であつて、これは本來

如何に純金が豊富に此の古墳に埋められてあつたかを推測せしめるが、形の完全なものとしては陪葬の馬に添へてあつた馬飾りに如くはなく、また玉飾も若干存し、漆器と刀子とは共に断片ながら、研究上からは特に價値の多い遺品である。金の薄板は種々の形のものを含んで、他の物質に被せ置いたか、または嵌め込んで裝飾とした類であることは、實例は僅少なから上記の刀子柄や骨製飾具の一部の實際から察せられる。形の上で面白いのは馴鹿の正面形や、其の双角、さては獸脚などを示した類であるが、其の草花文をした切り出しの金板で、面上に更に黒朱外一色の着彩をした例は、同じ金の切り板が刀子の柄に嵌入せられてゐる事實と併せて、朝鮮樂浪乃至北蒙古ノイン・ウラ山出土の漢代漆器の一部に見ると同じ技術を表したものとして特筆に値しよう。次に漆器の類はいづれも断片に過ぎないので本來の器形を推し得べくもないが、乾漆の系統なのは確であつて、其の一に光澤の高くて良質な朱漆地の上に褐漆の着彩(?)を加へた類であり、また他のやゝ大きくて、容器の縁片と覺しきものは、内面朱地をなし外側は黒漆地の上に朱で描いた文様の一部が見られて、共に從來知られた漢代の漆器との一致が明に看出出来る。其の玉飾りでは遺存した多數を占める管玉のうち濃い水色の玻璃製や木製金被せの類のあつたことゝ、西伯利亞産貂の齒牙から成る飾りの存在を記すべきであらう。櫛内から發見した骨製品の一群は其の適確な用途を明になし得ないが、周縁の穿孔からすると飾りとして他の物質に附したものと解す可く、それは第三圖に載せたが如き種々の形のものを含んで、表面に一種の唐草様文が沈彫で表

第 三 圖



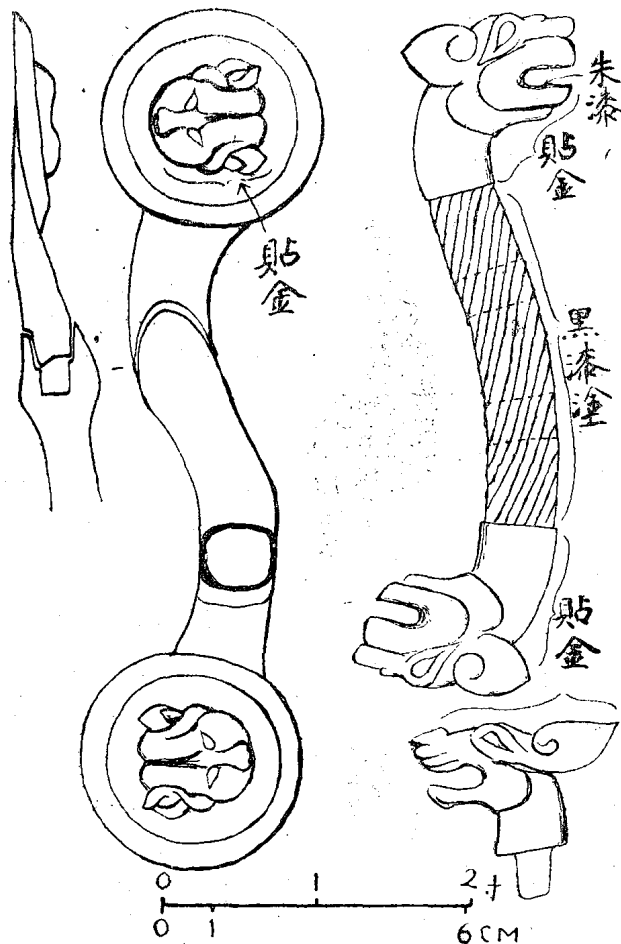
シベ古墳發見骨製裝飾品

はされ、うちに朱で彩色した部分と金箔を置いたのところが交互になつて、色彩美しく、また彫法の上にも鮮かな技巧を示してゐる(8)

陪葬の馬の飾具は上來のものゝ殆んど殘缺に過ぎないのと違つて、其の本來の着裝の状態を遺存した點に價値があり、また形式も面白い。いま中で親しく實物を見た第二並に第三の陪葬の馬に附してあつたそれを擧げて一斑を傳へることにしよう。兩者共に現存してゐるのは顔面部の飾り即ち面繫であつて、第二號の分は木地貼金銀の杏仁様に近い馬面を中心にして面繫に着けた革製金飾りの裝具が革紐上に斷續して遺存し、本來の形を容易に窺ひ得るもの、該裝具二種のうちの大形品は厚い圓形の革作りの臺上に四葉座透しの金の薄い板を加へ、空間に朱漆を埋めたものと覺しく、該

四葉座の形式がグリヤズノフ氏も既に云つてゐる如く、まことによく漢代の同圖様の特色を具へたものである。第三號の馬の飾具また同じ類ながら、前者の轡が鐵製の爲に形の全くないとは異なつて、木製のそれがよく遺存し、その形式に特徴がある。此の馬の轡飾りは二種發見せられてゐる。共に所謂S字

第四圖



ベシ古墳發見貼金木製轡飾

形の系統に屬し、飾るに動物形を以てしたものの、銅製の銜に附した該飾り具は第四圖に示す如く一は兩端に虎若しくば山猫と見ゆる動物の頭部を丸彫として、それに金の薄板を被せ置いたものであり、他は圓形の面上に相似た動物の顔を半肉刻として、其の部分に同じく金板を加へてある。而して前者

には口を開いた獸の兩顎部に朱漆を施し、また體部に黒漆が塗られてゐることが特に注意せられる。

以上はシベ古墳の出土品の一端であるが、なほこゝに附記すべきものに、同じく檜の内外から見出された盜掘者の遺棄した遺物がある。此の類としては一端の黒く焼けた白樺の皮で出來た松明様のものが、

牛の大腿骨を削つて作つた一種の骨斧類、木製の其の柄、大きな篋形をした板の破片など、共に數ふべきである。此の遺存の斧頭や柄の形式から調査者は盜掘が塚の營造後あまりながい年時を経ずして行はれたのであつてこの穿開がやがて室内の凍結を助成したものであらうと云つてゐる。

四

次に一九二九年の夏バズリックで發掘調査せられた一古墳は、同地の積石塚中の最も大きな一に屬して、徑約五十米突、高さ二米突、内外あり、群のほゞ中央部に南北に相並んで存して恰も主墳たる觀をなす二基中の南の方のものなのである。本古墳はルデンコ教授がグリヤズノフ、アドリアノフ(W.S. Adrianoff)兩氏等と協力して發掘を試みたのであるが、初にも一言した如く、これまたシベの古墳とほゞ同じ構造から成る木槨が圓形の積石の下方の地下に營まれてあつて、其の造構の一層整つたものであり、且つ陪葬の馬の装具に驚く可き豊富な資料を示した。

さて此の墳墓にあつては木造の室のある壙の深さは地表面下約四米突内外で前者よりはやゝ淺い。其の壙の一方に偏在した該木槨の二重作りで、矩形に近い平面形をとり長軸の六米突内外あるのはシベと相似てゐるが、本例では幅の示すところ、一端四・五米突であるが、それが他端に至るに従ひ若干の縮少をなしてゐる點が注意せられるのであるし、また高さ二米突に近い外室の壁は丸太各十一本を組合せて

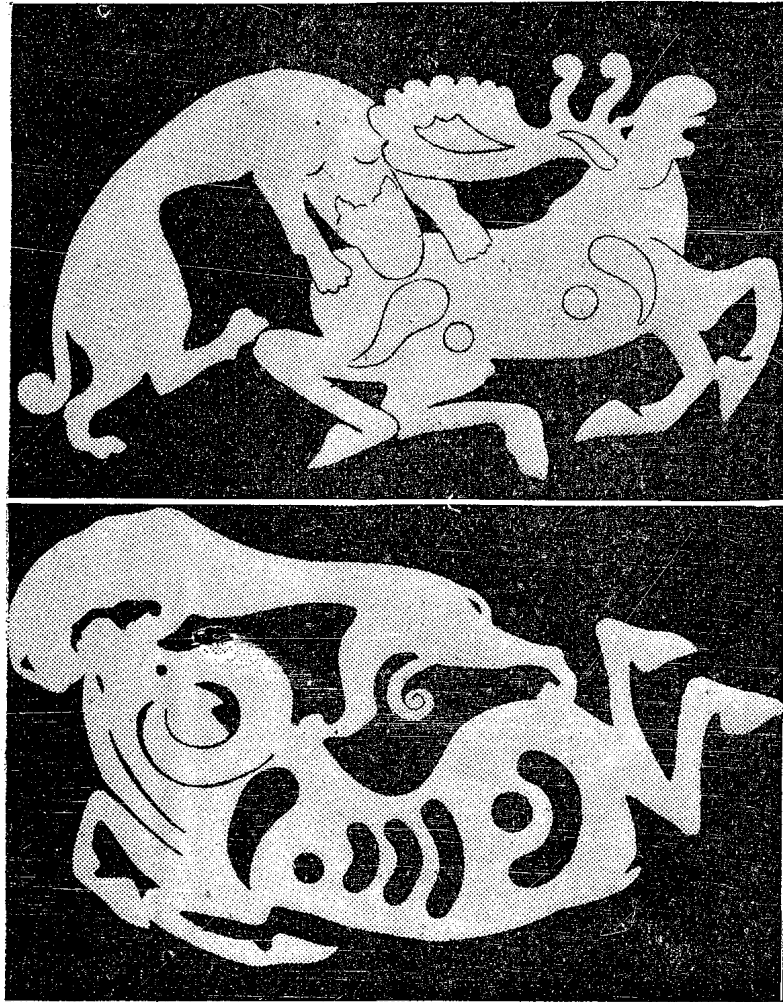
作つてゐるのに對し内室のそれは角材九個を井組にした手の加はつたもの、此の兩室の空間部には小割石を積んで堅牢を期し、なほ右の小石積みは内室の牀板の下部にも及んで室の安定を計つてゐる。而して内室の壁面には色染め縫合せの獸首飾りの羊毛を繞らし華麗な趣を添へてゐるのが珍らしく、該壁飾りが銅製の飾釘を以て面に附けられたのも記すべきであらう。此の室もシベのそれと同じく一方、即ち馬の陪葬せられた壙に對する部分に戸口が設けられ、また外室の天井を覆ふに三十本の材を並列し、三個の梁材を渡した上に丸太材を重ねた點なども、前者と全く同軌に出てゐる。

右の室の内部にはシベで見たと同じ位置に、而して全然同形式の彫り抜ききの棺を存したのであつたが、前者と同じく盜掘の厄に遇つてゐて、こゝでは棺内一物をもとゞめず、被せ蓋は内部を上にして身に重ねられてあつたと云ひ、室内また壁面飾りの外殆んど副葬品の殘存なく、僅かに若干の木製品が室内にあり、盜掘者の遺棄した斧の柄が壺片などと共に其の侵入した室の天井の上に殘存してゐたに過ぎなかつた。然し本墳でも室外の壙の北半部に陪葬の馬は、同部を覆ふた厚い丸太材の爲に、盜掘者が室内からそれを獲んと試みたにもかゝはらず、遂に果さず、盜掘から免がれて、引きつゞいて來た凍結現象に依つて從來にないあざやかな馬飾りの着裝の實際を今日に遺存したことは學界の大なるよろこびであらねばならぬ。私は九月二十七日の午後アレキセイフ教授に伴はれて、折りから滯在中の矢野博士、同行の島村孝三郎氏と共に露西亞博物館の一室で、これ等の遺物を目撃するの機會を持つたのであつた。そうして

其の華麗な馬飾りが、恰も近頃仕上げられた様な鮮かさを以て觀者にせまり、これを形成してゐる多數の木彫品の完全なる保存状態は、羊毛の色澤のフレッシュな點と相俟つて一見古代の遺品とするに踟躕せしめる程であつたが、同時に示された發掘現場の寫眞に依つて、盛夏なほ純白な凍結を示す墳内の状態から、然る所以を了解するに庶幾く、こゝに凍結なる自然現象に對し、またそれがグリヤズノフ氏の云ふ如く主室の盜掘に依つて導かれたものとすれば、盜掘者にさへ感謝すべき様な心持ちを懷いたことであつた。是等の一々の詳しいことはいづれ發表せられるであらうところの發掘者自身の報告に俟つ外ないが、一例を擧げるならば馬の装具は鞍と面繫に於ける杏葉とが著しい。前者にあつては羊毛製の臺が、いまの軍馬のそれに近い形を示して(9)、表面の左右に革製若しくは色染めの羊毛を縫ひ合せて圖様を表はした華麗な飾りを均勢的に置き、兩側附するに更に同じ質料の垂れ飾りを以てしたもの、また面繫に於いては透し彫りの革飾りを附した帯の上に木彫金銀箔置きの飾りを添へ、馬面、轡飾りをつないでゐて、同じ飾り具のある胸繫を加へると一具二十數個に上り、尻繫の革帯にも裝飾があり、馬尾また特殊の飾りを加へてゐるのを見受ける。而してそれが十頭を數へる陪葬の馬にあつて一つ宛鞍の飾り乃至杏葉其他の木彫の飾具の形狀を異にしてゐるのであるから、此の一古墳の示す資料としての馬具の豊富さは非常なものである。(10)

右の數多い馬具の圖様に於いて最も興味のあるのは鞍の表面の裝飾であらう。これには双禽文を並列

第五圖



種二文物動飾鞍見發墳古クツリズパ

した例などもあるが、主なモチーフは動物の噛み合つた状を寫したもので、第五圖に載せたのはその一例である。二者のうち一は馴鹿の背に虎か山猫の孰れかの怪獸の噛み付いた状を寫してゐて、これは染

めた異色の羊毛を縫ひ合せて作り上げた色彩の美しいもの、また他の一の山羊の上に同じ怪獸が乗つて口部を噛んでゐる光景を表はしたのは薄い革の透し彫りで、上に銀箔を置いてある。共に如何にもよく怪獸の躍動の状を寫し出してゐる點が注意を惹くのである。此の圖様は所謂廣義のスキタイ系文の範圍に入るべきものであるが、いまレニ

ングラードのヘルミタージユ博物館(Gosudarstvenni Ermitazh, Leningrad)に藏するシベリア發見の黄金製金具に見る處(11)及び北蒙古ノイン・ウラ山第六號古墳發見の毛氈の周縁に施された飾り(12)に近似を

示し、特に其の一は製作に於いて後者と同巧に出たものなのである。以上は鞍の表面の主な飾りであるが、なほ鞍に着けたものとして、後代の鞍橋部に當る處に施された山形狀の革飾りに一種の華文の透し彫文のあることは、既記の垂れ飾りの或物に動物形(特に山羊)を巧みに渦文化したのや、魚形、人面などを表はしてゐるものなどのあるのと共に記すべきであらう。それ等に就いてはこゝで一々實際の形狀を示し得ないが、私の受けた印象として、其の數種ある前者の表はしてゐるところ著しく希臘風の色彩を帯びたものであり、その點で第三圖に載せたシベ古墳發見の骨製飾具の文様に近いことが、後者に於ける動物形の取扱ひの所謂スキタイ風なのと好對照をなすものなのを擧げることが出来る。

面繫、胸繫等の飾り具即ち吾々の云ふ杏葉の類はすべて木彫であつて、其の牛肉刻に表はした圖樣には忍冬的な華文、蕨手樣文、人面等の珍らしい類を見受けるが、其の主要部を形成するのはやはり動物文であつて、山羊、馴鹿などの形が好んで用ひられ、それがいろ／＼と圖案上に變化が示されて居り、馬面に當る部分の山形のカーブを示すものにあつては中央に別な丸彫の獸首を加へなどして裝飾上の効果を計つてゐる。表面には金銀箔を置いたのを普通とするが、角などには革を被せたものや、革で作つたものなどもある。轡の鏡板の飾りまた杏葉と同じく木製で、動物の形をしたものが多い。驅走した馴鹿形や同じ山羊の牛肉刻の動的なのが、靜的な山羊の双頭飾りのものなどと並び存して如何に當代人の動物文を愛用したかを示してゐる。尤も中に忍冬唐草文を兩端に表はした例のあることは特記に値する。

圖版に載せたのは如上の杏葉轡鏡板の例であつて、上の四個は杏葉、下の一個は轡の飾り板の寫眞に外ならぬ。以て其の形狀の一斑乃至銳利な彫法を察することが出來よう。但し是等は何れも保存の爲に表面を洗つて腐蝕を防ぐ物質を塗抹した後に撮影したものであるから、金銀箔は殆んど失はれ、爲に少からず本來の面影を失つてゐる點のあるのを附記すべきである。

斯くの如き裝飾の馬具は陪葬の十頭の馬のそれぞれに置かれてゐたものであるが、別に豪華な馬の頭部飾り一具が同所から游離して發見せられて頗る異彩を放つてゐる。それは先づ革製鳥首文を附した鬣の飾りの前に厚い革を組み合せて作つた翼狀の双頭飾りがあり、其の中央正面に同じ製作の獅子とも見ゆる怪獸の頭首を作り出し、また顔面には薄い革で作つた虎の解剖形を附して、(13)是等を細い革紐で結んで一つの飾りに纏めた珍らしいもの。而して翼狀の飾り並に怪獸首には金銀の薄板の加飾があり、顔面の飾りは革の上に金板を被せ、該金板の上に黒色で細部を描き出してあり、更に尾部には青紺色に染めた毛皮を加へるなど裝飾に意を用ひてある。製作の上からしてこれを以て被葬者の生前最も愛重した馬飾りとするのは蓋し自然な見方であらう。

是等の極めて豊富な馬具からすると、室内の副葬品の富の如何ばかり大であつたかが容易に察せられるが、上記の如くそれは今日殆んど何物をも遺存してゐない。たゞ此の間にあつて考古學的研究の鍵とも云はるゝ土器の殘存が將來の考察の上に有益な資料を提供するものとして満足すべきであらう。私の

囑目した遺品は破碎片二個分であつたが、うち一個はアドリアノフ氏の努力で形が復原せられてゐた。これは高さ一尺一寸あつて、割合に安定な平底の上に丸形の母體があり、上邊にやゝ長い頸部を持つ胴の張つた瓶形の壺で、形の整つたもの。また他は前者よりも更に大きな壺の口頸部で、それは口縁が外に開いた式に屬してゐる。二者共に砂利を含むが、焼成がよくて、赤褐色を呈し、表面にはヘラ磨きの滑澤がある。同じ特徴の土器は一九二九年にアドリアノフ氏の發掘したアラゴル(Aragol)の(14)第五號墳からも出土してゐて、それがアルタイに於ける當代の土器を特色づけるものと思はれるが、さて該土器の吾々に與へた感じは、焼成其他に於いて蒙古小庫倫出土の史前土器に酷似したことである。グリヤズノフ氏に従ふと同類は露領トルキスタンにも分布してゐると云ふ。果して然らばそこに將來の比較研究上の興味が潜んでゐる様に見ゆる。

五

以上で不充分ながら兩古墳の構造並に出土品の一斑を録し終つた。いま進んで其の示してゐる性質の學界に與ふる興味の解説に入るに當つて、先づ攷ふべきもの、遺跡の年代觀であることは改めて云ふを要しない。これに就いて調査者の一人たるグリヤズノフ氏はシベの古墳を以て支那の漢の盛時に相當する時代のもの、即ち西曆紀元前後一世紀頃の營造とする見解を發表したが、パズリックの古墳に對して

は其の最初の記載では、前者との構造の類似、並に出土の馬具に著しくスキタイ系の特色の見られるのを注記し乍ら、年代の推定を避けてゐる様である。(15) 氏の此の見解の基く處、蓋し前者にあつては上に擧げた如く發見の遺物中に漢代の漆器片があり、また同代の文様を特色づける一の四葉座文が馬具に用ひられて居り、而もそれ等が近時支那の四隣に於ける遺跡の考古學上の調査の結果に負ふて盛行の年代が略ぼ確定せられた處に準據を置いたものであるが、後者にあつては發見の馬具は多種多様で其の分野の研究に豊富な資料を提供するが、うちに直接に絶對年代を推し得るの手掛りとなる遺品を缺いてゐるに依るものと察せられる。して見れば氏の説く處はまことに吾人を首肯せしむる穩當な見解である。さり乍ら氏の記載の世に出て後、スキタイ文物の東漸に對して獨自の見解を持し、その結果として支那の周の銅器を以て從來稱せらるゝが如き古代に遡り得るものにあらず、該年代はスキタイ文物を通じて判じ得べしとの大膽なる所見を發表(16)したボロフカ教授(Prof. Gregory Borovka)は、遺物の示すところを氏のスキタイ年代觀と對照してバズリック遺跡の營造を前三世紀とするの學説を得、是れを高潮した結果、今日ではグリヤズノフ氏も其の説に同するに至つたこと、氏の親しく私に告げられた處である。従つて兩者の推定年代は大體發掘者の側で定まつてゐると見てよろしい。右のバズリックの遺跡の年代説は上記の如く二者は其の構造に於いて軌を一にしてゐるが、シベに比してバズリック古墳の示す内容一固よりそれは馬具以外の副葬品を殆んど全部失つてゐるので、若干の遺品のあるシベとは正しく比較

し得ないが—はスキタイ的エレメントの極めて濃厚なものであり、同時に支那漢代の影響と解せられる分子の認め難い點を持つものであるから、前者に先立つ時期の營造とする考へは認容してよい様であるし、他方その馬具の或物の南露西亞發見に係る西紀前三世紀頃とせらるゝ遺跡の出土品に近似を見出すことなごから該實年代觀は推重して可なる様にも見ゆる。私は固より漫りに専門家の所説に疑を挿むを快とする者ではないが、たゞ此の場合西曆紀元前三世紀と云ふが如き明瞭な年代が示されたのに對して、本來南露に於ける狹義のスキタイ遺跡の一般の實年代觀が古典世界からの將來品の伴出に依つて立てられたもので、なほ頗る不完全な域を脱しない一の假説であり、ボロフカ氏の説は中でその特に著しいものとしてなほ學者の賛同を得てゐない類なのに於いて、それを移して遠く離れた西伯利亞の遺物を律した所説には俄かに従ふ事を躊躇せしめる。なほ右のバズリックの出土品は所謂スキタイ藝術の特質を多分に持つてはゐるが、純然たるそれではなくて、一種の地方的色彩の明に認められるものであり、うちへレニスチック風の分子を混ざる點などは彼の北蒙古ノイン・ウラ山古墳のそれに比してもよい。従つてシベ古墳よりも古く見るの説には誤りないとしても前三世紀などと定められた時代を直ちに採用することには少からざる懸念を懷かざるを得ぬ。これの正否は將來發見さるべき新資料に待つて決せらるべきであると思ふ。

さて兩古墳の年代がかく考へられることに依つて遺跡の示す諸般の事象は、其の時代のアルタイ地方の状態を窺ふ上に重要な物的の徵證を與ふるわけであるが、それがラドロフ博士の最初の調査に比して精密の度を加へたのみならず、内部の凍結と云ふ自然現象に負ふて、有機質の遺物まで殆んど完全な形態をとどめた點に於いて容易に求め難い資料を含むことが此の場合特に注意と興味とを惹くのである。

此の類としてグリヤズノフ氏はシベの古墳に於ける被葬者に對する埋葬前の特殊な手術の施された事實即ち遺骸を木乃伊とする一種の方法の行はれたのを新たに知り得たのを先づ記してゐるが、それと共に僅少な殘存品からではあるが副葬品に金錯の技術の既に行はれた確證を示すものゝあることや漆器の存在の明になつたことは、幸に完全な形を今日にとどめた馬具に於いて見られる華麗な裝飾上の技巧などと相俟つて、記録からは徵し難い此の地域の二千年前に於ける文物の既に幼稚の域を脱してゐたことを髣髴せしむるものとして注意に値しよう。更に兩古墳を通じて其の内部の構造が確められ、埋葬の實際を明になし得たことも、上に指摘した木乃伊の方法と關連して當代住民の死に對する觀念を考ふる新しい資料を提供するもの、而して馬の陪葬の多い點に彼等の風習並に其の愛重が察せられるのも面白い。かくて是等の資料に適當な解釋を施すことに依つてアルタイ地方の古代が新しい姿を以て現代に再現せ

られるわけであり、本發掘の齎す業績の一の右の點にあることは疑ふの餘地がない。さりながら、一層重要な點として擧げらるべきは既に發掘者も明言してゐる如く、多數の遺物の示現する諸性質を通じて攷へられる處の古代に於ける東西文物の交渉に對する示唆であらねばならぬ。

上來の限られた記述からしては、いま此の重要にして且つ興味の深い問題の據るところを明瞭になし能はないが、而も二者のうちバズリック古墳發見の馬具に於いて圖様を構成する主要素として動物文の優勢であり、其の取扱ひ方に所謂スキタイ風の特徴の顯著なのは容易に認められる處であつて、同時にまた若干の希臘風の色彩を帯びた裝飾文の存在をも指摘し得るのを先づ記すべく、他方シベの遺物の示すところは動物文が圖様のうちで重要な分子をなしてゐる點は前者と同一であるが、而も別に漆器の如き支那の製作品を含み、また動物文から成り立つてゐる馬具に漆を用ひたり、馬具のうちに純支那的な圖様を見るなどの違つた性質を併せ具へてゐることが該考察上の據所として數へられよう。前者の示す處は近時西歐學者特にロストツエフ教授一派の好んで説く所謂スキタイ文物の東漸を如實に物語る究竟の考古學上の資料として、若し其の年代が確められると意義の一層加はるものであり、現にポロフカ氏の如きは斯く解して本遺跡を特に重要視してゐるのである。鄙見を以てすると右のバズリックの出土品は如上の特色を持つことに疑はないが、なほ純然たるスキタイの藝術品とするに難い諸種の性質を併せ有してゐるから、彼の從來の西伯利亞發見遺物に對して一部學者の與へたスキタイ、シベリア風文物

なる名稱がそれにふさはしく思はれる。従つて南露のスキタイ遺物觀を移してそれを律し難いこと、一九二四五年に北蒙古のノイン・ウラ山で發見せられた遺物に表はれた處と相似てゐるが、その上に表はれたスキタイ藝術の強い影響は固より否み得ないのである。その點から前年該ノイン・ウラ遺跡の檢出に依つて外蒙古の一隅でのスキタイ系の顯著な遺品の發見の一部學者を驚かせたことが、こゝに地理上から中間に位する本例の發見に依つて前者の存在が合理化せられると共に、西伯利亞に於ける其の東漸の徑路の究明が一の確證を加へたことになるので、固より學界の關心事であらねばならぬ。

さりながら右の事實と共に當然顧みらるべきはシベ古墳の示す性質である。同古墳出土品の示すところ一面に於いてパズリックのそれと同じ趣を持つてゐることは上記の文から容易に認められるが、他方それと對立して漆器の如き支那漢代の遺物の存在が著しく目立つのみならず、其の文物の影響とも考へらるゝ遺品を併せ存する點に於いて、同じ事象の一層濃厚なノイン・ウラ山古墳群の場合と併せて從來閑却され勝な漢代文物の西方への傳播が考古學上から新たに論究され得る資料を提供するものとして吾々に興味が多い。尤も同種の遺物は少許ではあるが西伯利亞、南露、高加索に見出されてゐるが、資料としての價値に於いて不十分な憾を持つものが大部分なのであるから、こゝに支那の製作品と其の影響の下に生じたと認められる遺品との併存は該考察上重要な新資料として其等の詳しい報告の發表が期待されるわけである。(17)

之を要するにアルタイに於ける兩遺跡の示すところ、濃淡の差があり、またその詳細に於いてなほ多くの問題をのこすものではあるが、東西の二つの文化の性質を其の上に表現してゐるものとして(18)、其の分野の研究者の關心に値し、本遺跡をして廣い文化史的な意味を獲得せしめるが、翻つて其の二つの物の如何に表はれてゐるかを顧みるの際にそれは單なる違つた潮流の並存ではなく、シベの古墳にあつては、所謂スキタイ系のうちに漢の技術を取り入れて一つの新しい形式を生じたのが見られ、バズリックの遺跡に豊富な馬具の形式また上記の如く單なるスキタイ藝術の直模でないことが考へられて、そこにこのものゝアルタイに於ける所産、即ち本來の何れとも違つた特質を備へてゐる。それ等を正しく解することこそ新發見を通じて當代アルタイの文化を祕を開くの鍵なのである。

此の發見の齎した新事實に就いてはなほ記す可き點が少くない。例へば遺物の主要部を占めた馬具が單に豊富であるの外によく着裝の原形をとらめた事實の如き、元來乘馬が露西亞から西伯利亞にかけての北方民族の間に廣く行はれた習俗として、馬の陪葬馬具を添へるの風を生じ、從來甚だ多くの發見例を見てゐるが、其の大部分は學術的な記載を缺き爲にうちに用途の明ならぬものがあり、其の調査を経たものにあつても有機物質は消失するのを常とするから明確でない點が少くなかつたのに對し、これは新たに正確な實例を示し其の疑問を氷解し得るものとして當然擧げらるべきである。また明確に示された其の墳構成の主體をなす木造の室が、其の架構の原則乃至封土との關係に於いて、嚮に見出されたノ

イン・ウラ山の漢代の墳墓に同じく、他方北朝鮮の漢の樂浪郡時代の遺跡の木槨室の構造とも合致してゐるが如き、よし細部にそれぞれの特徴を持つとは云ひながら、時代の相近い點から、其間自ら相互の關係の存在を考へしめるものがある。これは樂浪の漢墓の系統觀に關心の本邦學者に考察上の一示唆を與へるものである。然しそれ等に就いては他日詳しい報告書の公刊された際に説くことにして一先づ此の紹介文を終らう。

(一月四日稿)

註 (1) The *Compte Rendu* of the Imperial Archaeological Commission for 1865; Prof. V. Radloff's *Aus Sibirien*; *Loose Blätter aus dem Tagebuche eines reisenden Linguisten* 等

(2) Prof. Alexis A. Zakharov; *Antiquities of Katanda, Altai* (The Journal of the Royal Anthropological Institute, Vol. LV, 1925)及び同氏の *Materials on the Archaeology of Siberia, D² V. V. Radloff's Excavations in the Berel Steppe (Eurasia Septentrionalis Antiqua, Helsinki, 1928)* などである。なほ別個のアルタイ地方出土品に關するものとして *Ancient Wood and Bone Work from the Altai* (The Antiquaries Journal Vol. VI. No. 4, London 1926) など。

(3) Prof. S. Roudenko et A. Glonhov; *La nécropole de Koudrygné dans l'Altai (Matériaux ethnographiques, Tome III Leni-ngrad, 1927*

(4) 梅原「露西亞の博物館と其の考古學的調査事業」『藝文』二十一年第一號) 參照

(5) 是等の遺跡に關する記載としてはグリヤズノフ氏の筆になる簡單な二文がある。一つはシベ古墳の略報告で“*Chyelovyeik*” 1928. No. 2-4. Pp. 217-219. に載せられたもの(同一の獨逸文はウインの「史前學雜誌」一九二八年度にも載つてゐる)。また他は“*Pitroda*” 1929. No. II. Pp. 971-984. 所載のインズブリック古墳の概要である。私は矢野教授の好意に依つて自己の所見の外これ等の文を利用することを得た。また挿入の圖は該二文に發表せられた範圍に限つたが、グリヤズノフ氏がアルタイ地方に於ける考古學上の新發見(梅原)

ら焼付を與へられ等して、明瞭の度を加へたものがある。記して兩氏に感謝の意を表したい。

(6) 是等の遺跡並にシベ、パズリックの位置に就いてはアドリアノフ氏の示教を受けた。それを圖示したものが第一圖である。

(7) 此の項註(2)に記したザハロフ教授の報告に據る。

(8) 是等と相似た骨製の裝飾品が、いまモスコウの國立歴史博物館に收藏するポゴディン教授の蒐集品(Prof. M. P. Pogodin's Collection) 中であつて同じくアルタイ出土と云ふ。ザハロフ教授は註(2)の第三に擧げた文に於いて(1)と同式のものゝを bone diadem かゞし、また(1)と同類に bone plaque なる名稱を與へてゐる。

(9) 鞍の形は恰も人體の肺臓の如く、前後は單にそれが隆起するのみで、特別な鞍橋がない。尤も唐草華文透しの革飾りがその縁に近く附されて鞍橋への發達の過程を示してゐる様でもある。

(10) 華麗にして此の如く完備した各種の馬具のうちの一の鐙をも存しないのはこゝに注記して置くの要があらう。鐙はシベ古墳からも發見せられてゐない。これ蓋し當代人の乗馬に其の使用のなかつたに依るものと解せらる。

(11) これ等はビーター大帝の蒐集に係り、世に著聞するもの、其の主要なものは手近な Prof. Brovka; Scythian Art (London, 1928) にも載せてある (Plates 48, 52)

(12) ノイン・ウラ第六號墳の主棺の下に敷いてあつた毛氈がそれで、圖は同古墳に關する最初の報告(露西亞學士院出版)に載つて居り、またバーリントン誌のエッツ氏の文にも掲げられて、後者が我が國で度々復寫せられた顯著なものである。

(13) これと同じ虎の解剖形を表はした刺繡の布が北蒙古ノイン・ウラ山の古墳からも發見せられてゐるのは、同圖案の北方に於いて稀有でなかつたことを示すものとして興味を惹く。

(14) 此の古墳はパズリックからあまり遠くない地點に散在する同じ積石塚の一つであるが、規模の小さいもの。内部完存して出土品は土器の外に、共通な獸首を打出した金製の飾りや、轡等があり、また利器として丁字形柄頭の所謂北方系の銅劍、小銅刀が存してゐた。此の後者は失はれたシベヤパズリック古墳に副葬せられたであらう處の利器の性質を推測せしめる一つの據所となるものである。

(15) 註(5)に記した二文の説く處に基く。

(16) Gregory Borovka; Wanderungen eines archaisch-Griechischen Motives über Skythien und Baktrien nach Alt-China (Fündzwanzig Jahre Römisch-Germanische Kommission. Berlin und Leipzig. 1929)

(17) 梅原「考古學上より觀たる漢代文物の西漸」(小川博士還曆記念『史學地理學論叢』所收)參照。なほ昨秋の旅行で、更にシベリヤのオムスク・ミヌシンスク其他發見に係る若干の新資料を調査することが出來たことを附記して置く。

(18) シベの古墳に漢代の遺物が存し、パズリックにそれを見ない點をグリヤズノフ氏等は問題として、其の理由を考へてゐるが、馬具以外の遺物を全く失つてゐるパズリック古墳に於いて支那の遺物がないと斷ずるのは如何であらうか。従つて現在の知見から、同地方に漢の文化の及んだのを紀元前後の一世紀と見、パズリックの實年代と云はれる前三世紀にはなほ西方の影響のみであつたとする解釋の如きは考慮の餘地が多い。

梅原末治